

学友会東京支部だより

南 高

発行 和歌山県立南部高等学校
学友会東京支部
所在 〒363-0022
埼玉県桶川市若宮1丁目
8番地 12-204

東京支部長 寺西 寛志

明けましておめでとうございます



東京支部の皆様にはお健やかに新年をお迎えのこととお慶び申し上げます。

平素から東京支部には多大のご支援、ご協力を賜り誠に有難うございます。

お蔭さまで支部だより「南高」も、第8号誌発行の運びとなりました。これもひとえに皆様方のご協力の賜と深く感謝いたしております。

昨夏の長かった猛暑のため、遅れてやって来た秋が足早に通り過ぎ、冬の訪れが早かったような気がします。四季の移ろいはい何故か人間の生涯に似て、誕生から芽生え・茂り、そして花を咲かせ実を付け、やがて色を染めて葉を落とし、厳しい冬を過ごします。

人の一生は限りある一度きりです。その時々のご過ごし方や、こころの持ち方で色合いが変わります。今日、明日を明るく元気に過ごすよう心がけたいものです。

私たち支部運営にあたる者は、この東京支部が故郷を同じくする者同士その近況やふる里の思い出を語りあうキッカケの場となり、少しでも日々を明るく元気に過ごして頂ければと願っております。

今年も支部の各地区では幾件かのウォーキングが計画されることでしょう。これまでに参加者は、懐かしい級友や幼馴染とのお喋りに興じながらの散策に大層楽しい一日を過ごしています。

なお、第5回の総会・懇親会を本年 11 月に開催いたします。どうかお一人でも多くご参加下さいますようお願い申し上げます。

学友会東京支部 21 年度(平成 21 年 10 月～平成 22 年 9 月)会計報告 (単位 円)

収入の部		支出の部	
前年度繰越金	334,705	預かり賛助会費当期分取崩し	114,000
第 4 回総会親睦会費 (43 人)	301,000	第 4 回総会運営費	452,993
預かり賛助会費当期分(57 人)	114,000	役員会議費	48,635
当期賛助会費 (56 人)	112,000	会報第 7 号発行費	89,442
来賓御祝儀・寄付・その他	96,835	通信費・雑費	135,710
会報広告掲載料	20,000	事務用品費	35,758
賛助会費(次年度以降分預かり)	6,000	次年度繰越	108,002
合 計	984,540	合 計	984,540

第 5 回学友会東京支部総会・懇親会 決まる

日 時： 平成23年11月19日(土)11:30～15:00

場 所： 品川プリンスホテル

★お早めにカレンダーにマークをお願いします

成田山表参道と新勝寺 散策

6月7日(土)



が、初めて来た人も・・・。

成田山新勝寺は真言宗智山派の大本山。1000年以上の歴史をもつ全国有数の霊場で、成田のお不動様と親しまれ、年間約1000万人以上、正月三が日には何と約300万人の参拝客が訪れるそうです。境内は広く新旧のさまざまな建造物が並んで、庶



大本堂《諸願成就の御護摩で祈禱》

屋食は公園内のテーブルでなごやかに・・・楽しいひとときでした！食後、境内の東側一帯に広がる公園内の滝や池をのんびりと散策。この大公園、なかなか趣きのあるコースでした！帰りは参道にある漬物屋・雑貨屋などの店をあちらこちらと覗いたりお買物をしたりして、みんな満足。甘味処「よねや」でのお喋りもまた楽しいものでした。

後日、参加された石田明子さんから次のような嬉しいご感想をいただきました。

成田山には毎年初詣に出かけます。

初詣で賑わう成田山も、この頃になりますと参拝客は少なく、お仲間同士おしゃべりしたり、お店でちょいとみやげものなどの買い物をしたりしてもバラバラになってしまうこともなく、ゆるりゆるりと散策できました。

参道には昔ながらの漢方薬を扱う薬局、昔の人は無病息災をお祈りして、その後家族や知人のために煎じ薬になる薬草など買い求めたのでしょう。そんな名残りがする薬屋さん 2,3 軒、また、活かうなぎをさばいて蒲焼きにしてお客に出しているお店、素通りするにはもったいない香り、ちょいと立ち寄って香りだけでも・・・と落語にでてくるような場面にも出合いました。

私共は成田山の公園のテーブル・ベンチで昼食。市販のおにぎり、手作りのお弁当、それぞれ持参したものを広げて食べました。お仲間の中には、漬物や野菜サラダを余分にもってきてくださった人もいて遠慮なくいただきました。

ふるさとを離れて半世紀、遠く感じることもありますが、このときばかりは、



仁王門

民の信仰の場の雰囲気を残しているようでした。私たちもご利益をと、それぞれに祈禱しました。弘法大師開眼の本尊・不動明王を祀る大本堂や、国重要文化財に指定された建造物などは私たちに荘厳さを感じさせてくれました。

江戸中期～末期の建築である仁王門・三重塔・釈迦堂・額堂・光明堂の5棟は国の重要文化財に指定されているそうです。



三重塔

国の重要文化財。1712年（正徳2年）建立。高さ25m。初層は各面の中央を扉とし、その両脇の柱間には十六羅漢の彫刻を施す。この他、柱、長押、貫などの部材に地紋彫りを施すなど、近世建築らしく装飾性豊かな塔である。

横浜 再発見！！

7月23日(金)



横浜港

梅雨末期、神奈川地区主催の「新しい横浜再発見」に 14 名の方々の参加がありました。局地的に激しい雨という予報にもかかわらず、一滴も降られることなく比較的涼しい一日でした。(ホッ！)



先ずは横浜公園へ。西洋風公園の一角に昔の遊郭「岩亀楼」の石灯籠があり、その辺り一帯が日本風庭園になっている。木々が被い繁りちょっと見逃してしまう場所だった。日本大通りに出て、裁判所・新聞博物館・放送記念館などの前を通り King と呼ばれている重厚な建物の県庁本館を眺め、Jack として親しまれている横浜市開港記念会館(国重要文化財)へ。この建物の歴史をボランティアガイドさんに聞く。



ステンドグラス

関東大震災にも唯一残った時計塔、開港当事を描いた大きなステンドグラス。何度も内装、外装の補修が行われ震災当事の雰囲気の一部再現して平成 13 年に再開館されたと言う。「覗き見ご遠慮下さい」の貼り紙のあるホールを覗き見させてもらって、説明がだんだん熱を帯びてくる。一日中でも説明できるというガイドさんに感謝して外に出た。優雅な佇まいの Queen(横浜税関)も見て、象の鼻、鯨の背中の愛称がついて大変貌した大桟橋辺りまで横浜埠頭を散策する。

レストランでの昼食は予約していた眺めのよい個室で皆ほっと一息。ランチメニューがサラダ、ドリンク、デザート付で 1000 円以下と、この場所この個室でなかなかリーズナブル。昼食後は赤レンガ倉庫の裏側を歩く。海上保安資料館で 2001 年 12 月 22 日に拿捕した北朝鮮の工作船を見る。ここでの説明に質問も多く出て、時間超過、男性陣の興味を大いに掻き立てたようだ。



開港記念会館の時計塔

昔の横浜港駅のプラットフォーム、震災で壊れた旧横浜税関事務所の遺構なども見て、バス「赤いくつ号」に乗る。どこまで乗っても 100 円、昔の電車を彷彿させる天窓付のバスで中華街などをぐるぐる廻って「港の見える丘公園」へ。横浜港のベイブリッジを眺めながら大きく変貌していく横浜を肌で感じました。今日も一日良く歩きよく喋りました。



いつも通り最後はメルパークでお茶をして別れました。初対面の人にもいましたが故郷の人というだけで心が広がってやさしくなれる、笑顔になれる。次回はあなたも一緒に如何ですか！



大田区の魅力 発見 !!

馬込 ウオーク

11月3日



猛暑の終息を待ちかねていたような爽やかな秋晴れの日、私たち大田区探訪メンバー14名は、都営地下鉄浅草線の西馬込駅西口に集合。ここはJR山の手線の五反田駅より4駅目で、地上は第2京浜道路が通り、大小の車輛が間断なく走っている。これを横断し大型スーパーのある商店街を通り抜けると、間もなく大田区立郷土博物館に到着する。

館内には馬込・池上・山王にかけての地形が一望できる展示物があり、それによればこの地域一帯はかなり高低差が大きいと思われる。展示物の中での麦ワラを材料にした手技の精巧な愛らしい細工物は江戸時代の東海道大森の特産土産品だったとのことである。また、遠浅の大森海岸の特産品だった海苔の植え付けから製品までの工程等の展示コースを各自それぞれ興味深く見学した。



大田区の獅子舞

ではないだろうか。

続いて、郷土博物館からはそれほど遠くない禅寺の萬福寺を訪ねる。ここは、小高い丘の上にあり、墓域の一隅に室生犀星の俳句を刻んだ碑が建っていた。当寺で開かれた句会の記念碑なのだろうか。いずれにしてもこの近くに犀星の住居があったようだ。

探訪メンバーが次に向かったのは熊谷恒子記念館。恒子の旧宅が改修されて大田区立熊谷恒子記念館として一般公開されている。入口の案内板によれば、「熊谷恒子(1893~1986 勲四等宝冠章を受章)は、現代女流かな書きの第一人者で、美智子皇后が皇太子妃となられたときのご進講者として知られ～」とあり、見学者一行は、平安朝の伝統的書法による流麗高雅な書に息を呑む思いを味わつたらしく、誰であったか、思わず忘れ物をして記念館の女性が慌てて届けてくれる一幕もあった。

昼食は、池上本門寺の門前にある「本門寺そば」で採る。私たちの訪れた日は祭日とあつて店内は大層な混雑ながら、そば、丼はなかなかの美味。食事をしながらも懐かしい郷里の仲間との会話が弾んだ。



五重塔(重要文化財)

食後は、加藤清正寄進と伝わる段数 96 の石段しきょうなんじざか(此経難持坂)を上り、本門寺の境内を散策する。この石段は池波正太郎著の「鬼平犯科帳」シリーズの中の一話「本門寺暮雪」の舞台にもなっていて、晩冬の雪降る夕刻、門前の茶店「弥惣」を出た鬼平こと長谷川平蔵が石段を上る途中、突如薄闇から何者かに斬りかけられる場面であつたと思う。

本門寺では、この日(11/3)七・五・三の祈祷のため、晴れ着姿の子供達が一親や祖父母に手をひかれて、ちょっぴり気恥ずかしげで、それでいて誇らしげな愛らしい様子が境内のあちこちで見られた。

寺域の堂宇の大半は戦災で失われたが、五重塔は焼失をまぬがれた貴重な古建築の一つとのこと。高さ 29 メートル、全面ベンガラ塗りの赤で、建築様式は初層和様で二重から上は禅宗様と云うそうである。この塔だけは、建立から 400 年の歴史の流れを静かに眺めてきたのだろう。この日も秋の木漏れ日の中にひっそりと佇んでいた。

西側の谷にある日蓮聖人御廟所の大坊本行寺等を参拝した後、本門寺を離れ、この探訪の最終コース馬込文士村の一角にある 川端龍子記念館へ向う。川端龍子(日本画家)が和歌山県出身と知り親しみを感じた。館内に足を踏み入れたとたん、何とそこには、迫りくる大作が!! 目をみはるばかり。この館を平面図で見ると竜の落とし子(龍子)の形をしているようだ。また龍子自身が設計したという樹木に囲まれたアトリエ(旧邸)も当時のまま残されていて、素晴らしかった!

個人ではなかなか訪れることのない馬込周辺の散策。

故郷の友と語りあいながら・・・自然と文化に触れた楽しい一日だった。

今回は時間の関係で回れなかったが、馬込周辺には数多くの文士所縁の場所や記念碑があり、機会があれば故郷の友と語りあいながら巡りたいものです。



龍子記念館前で みんな笑顔



室生犀星の文学碑



今、私たちの母校「南高」は、少子化や学区制改定等により様々な面で影響を受けています。それでも、毎年 220～230 名の卒業生が元気に巣立っているようです。

まもなく次の巣立ちが近づいています。その前途では厳しい現実にもぶつかることも多いと思いますが、初心を忘れず明るく元気に突き進んで欲しいものです。今回は、昨年3月1日発行の「南高新聞」に掲載された卒業生の希望溢れる声の幾つかをご紹介します。

三年間の思い出

★私は小さい頃からエレクトーンを習っていて音楽がとても好きでした。高校に入ってから吹奏楽部に入り、楽器を吹いて充実した生活を送れたことが良い思い出になりました。 3A 玉置知世

★幼稚園・小中とクラス替えがなく、みんなずっと一緒でした。高校でみんなバラバラになり不安だった私に一生の友達ができました。おばあちゃんになっても友達！ 3B 栗林佳恵

★南部高校に入って、たくさんの思い出ができました。友達と文化祭のダンスで夜まで練習したり、色々話して笑ったりと毎日毎日がすごく楽しくて三年間があつという間に感じました。みんな大好き！！ 3D 田中亜季

★陸上部に入って、三年間辛い練習も仲間と助け合いながら乗り越えてきました。その結果、個人と駅伝で近畿大会に出場することができ、最高の思い出になりました。 3D 楠本静香

★クラブでキャプテンをやらせてもらってから考え方が少しずつ変化してきて、今までの自分とは違った自分を見つけることができました。 3D 谷口皓介

★三年間、バスケの技術だけでなく人への思いやりなど、今後にも役立つことを教えてもらいました。今のチームと今の先生に出会え、バスケができ、私は幸せでした。 3D 原田奈津希

★三年間で一番印象に残ったことは、二年生の時の球技大会のキックベースボールで準優勝したことです。みんなが一つになりました。 3E 藤井玖美

★高校に入って一番の思い出は、農業クラブの近畿大会に行ったことです。 3F 原 成哉

★縫い物などで最初まったくできなくてあきらめたくなったけど、最後までやり通して喜びを知ることができました。 3G 岩橋江里

家族や後輩への感謝の気持ち

★三年間、反対を押し切り部活動が続け、迷惑ばかりかけてきたけど、いつもコンサートを見に来てくれ陰ながら支えてくれたお母さんありがとうございました。 3A 渡部な都実

★三年間バレーを続けられたこと、無事卒業することができるのは、いつも周りの人たちが支えてくれたからです。感謝の気持ちを忘れずに、今度は私が恩返しをしたい。 3D 山田千草

★テニス部へ。今までヘタで頼りない先輩でゴメン。今までみんなとテニスができて楽しかった。これからは、一人ひとりそれぞれの目標に向かって頑張ってください。今までありがとう。 3E 中井陽介

★野球部の皆さんへ。一緒にクラブをやってきて、最後には準優勝という結果が出てとても良い思い出になりました。後輩の皆さんにはとても感謝しています。今年は絶対甲子園に行ってください。 3E 津村一輝

★この三年間南部高校へ通えたのはお父さん、お母さんのおかげです。本当に感謝しています。加工部のみんな。みんなと大会に行けて楽しかった。ありがとう。これからも頑張ってください。 3E 能城 雅

将来の夢

★私は将来、インテリアデザイナーになりたいです。これから勉強も難しくなると思いますが、新しい環境で新しい友達と出会い、夢に向かって前進していきたいです。 3A 廣澤沙織

★将来は飛行機の整備士になりたいです。整備士になって成田か羽田で Boeing 機や Airbus 機を整備したい！ 3E 島 翔一

★自分の将来の夢は柔道整復師の資格を取り、スポーツ選手の専属トレーナーになることです。怪我のため思うようにスポーツに取り組むことができない選手をサポートしていきたいです。 3E 前田有輝

★将来の夢は地元で農業をしたいということです。自分が地元のリーダーとなり、地元の農業を活性化していきたいです。 3F 堀口拓児

★私は小学校の頃から、美容室で働くのが夢でした。美容専門学校に入って、資格を取って、お客さんから人気のある美容師になって、いつかは自分の店ができたらと思います。 3C 柏木麻美

★将来は美術方面の仕事に就いて、たくさんの絵を描きたいです。 3C 塩崎瑞希

現代社会について思う

★国同士の差別をなくし、協力して世界がひとつの国になればいいと思います。 3A 小池一誠

★最近、日本国内で麻薬の事件が増えてきている。なぜ麻薬などするのか解からない。 3B 川口 遼

★今の社会はすごく厳しい世界だけど、それに負けない大人に私はなりたいです。 3F 山口真美

※ 卒業生の声は他にも数多く寄せられていますが、紙面の都合で割愛させていただきました。

おたよりコーナー

「58年ぶりの“修学旅行”」



姓村上)、大阪方面は安村、この両君と何度も電話でやりとりし、それぞれに希望をまとめてもらい、結局、日光まで行くのは諦めて、東京に2泊して都内見物と鎌倉・江ノ島観光にしぼることにした。

さいわい宿は、わが学友会東京支部会員である吉田幸夫君(昭和 52 年卒)の厚意と尽力で、品川駅にちかいグランド・プリンスホテル高輪別館の和室に連泊できることになった。旧宮家の広々とした庭園に囲まれた一郭で、各部屋もゆったりとしていて、寛いで語り明かすのには最適だった。

さて、初日の5月11日午後1時、品川駅に新幹線に到着したのは、南部、田辺、印南から8人(うち女性5人)、大阪方面から5名。それに関東から4名が加わって、合計17名の顔が揃った。

チェックインもそこそこに、ホテルに荷物をまとめて預け、東京駅の丸の内南口から、「オー・ソラ・ミオ」という駄洒落めいたニックネームのオープンバスに乗り込む。昨秋から運行し始めた「はとバス」自慢の新型車で、屋根なしの2階から、東京の名所を高みの見物できるのが珍しい。2時間ほどで、二重橋前、日比谷公園、議事堂、官庁街、東京タワー、レインボーブリッジ、お台場、築地、銀座と回る。58年前には東京タワーもなく、高層といえるようなビルなどは、どこにもなかった。いま、その東京タワーの下をめぐり、数十階のビル群の間を通り抜けて東京湾上に出る。レインボーブリッジから左右に停泊中の船や湾岸の建造物を見て、隅田川にもどると、向こう岸のはるか先に、目下建設中にスカイツリーも望むことができる。この塔はすでに400mを超えて、東京タワーをしのいでおり、完成すると634メートルになるという。

東京駅に戻って別の観光バスに乗り換え、「夜の浅草と老舗の味」をテーマにした夜のツアーに出発する。改修中の観音様に参詣したあと、浅草演芸ホールで落語や紙切りを見て、寄席の雰囲気につれ、大正・昭和初期に文人たちに愛好された“すき焼き”の「米久」で老舗の味に堪能する。

この座敷で互いに近況などを語り合うなかで、印南在住の岡本崇君が献血を訴える講演をして各地を回っていることが話題になった。彼はかつて幼い愛娘を白血病で失い、その忘れがたい想いを一冊の本にしているが、こうした悲痛な思いを親たちにさせたくない、献血の大切さを機会あるごとに出向いて、語りかけ呼びかけている。切々と訴える彼の姿が1週間ほど前のNHKの「おはようニッポン」で紹介されたばかりだった。彼は翌々日にも講演の予定があり、その準備もあるからと、この夜一泊しただけで帰っていった。

夜のバスツアーは東京タワーの展望台から首都の夜景を眺めて終わった。関東在住者も含めて、夜間にここに昇るのははじめてという人が多く、光に溢れたビル群と街々を眼下にして、あらためて時の移ろいにそれぞれの思いを馳せていた。

翌2日目の観光は朝8時にホテルを出て、前日と同じ丸の内からスタート。バスは東京湾、羽田、横浜を高速道路で通過してひたすら鎌倉をめざす。

まず建長寺、ここは修学旅行のときに立ち寄ったかどうか、その記憶すらない。だが、生い茂った巨木が立ち並ぶなかで、格調高く聳え立つ山門や本堂の威容に接し、鐘楼、庭の木や石や池、そして庫裏などの佇まいに囲まれていると、凛とした厳粛さに打たれ、それが心の奥深くに刻みこまれる感じがする。16歳の高校生では分かるはずのなかったことが、歳を重ねることでいま受け止めることができる。それを体感できたのは、素晴らしい収穫だった。

鶴岡八幡宮では、実朝が命を落とした現場を“観て”いた大銀杏が、先ごろの強風で倒壊し、巨大な切り株だけが残さ

れている。修学旅行中の生徒たちの明るいざわめきのなかであって、かえって無惨な印象を与えていた。

鎌倉料理ならぬ京料理の「御代川」という店で昼食を済ませて、長谷の大仏に着いたころには、雨模様の空がぬぐわれるように晴れてきた。五月の陽光が溢れるごとく新緑の木立にそそぎ、大仏の端正な顔に見事な陰影を与えていた。与謝野晶子が「美男におはす夏木立かな」と詠んだのは、まさしくこのような情景だったにちがいない、彼女がこの歌を詠んだ100年前とここは変わっていないのだ、と独り感慨にふける。ふと後ろをふり返えると、わが同窓の女性5人が揃って大仏様に見とれている。歩み寄って、うろ覚えの晶子の歌を披瀝したのはよかったが、あとで調べてみたら、上の句が少なからず違っていた。「鎌倉や御仏(みほとけ)なれど釈迦牟尼(しゃかむに)は」というのが彼女の歌い出しだった。もっともあの御仏は実はお釈迦様ではなく、正しくは阿弥陀如来だそうである。歌人晶子は仏像には詳しくなかったと言えるかもしれないが、しかしそれで、この歌の価値が損なわれることには決してならないだろう。

江ノ島は、橋を渡った先に、みやげ物や海産物の店が並ぶ、その喧騒は昔のままだ。違うのはエスカレーターとエレベーターで昇る展望台ができていて、それを囲んで色鮮やかな花壇が広がっていることだ。料金はかなり高かったが、見晴らしは素晴らしかった。東ははるか房総、そして三浦半島、西は伊豆で、水平線が大きく円弧を描いて、ひろびろと太平洋を見渡せる。北方にはまだ一面に雲がかかっている、富士は見えなかった。

食事を挟んで4時間半、いずれも広い寺社の境内を随分歩きまわったが、だれも疲れた様子は見せなかった。バスを乗り降りする度に、三々五々に違った組み合わせのグループができて、話が弾んでいた。長く会ってなくても、紀州弁で言葉を交わすと、誰とでもすぐに昔に帰ることができた。

あとは一路、東京へ。夜の宴会会場である品川プリンスホテルには、ツアーに参加しなかった関東在住組、腰を痛めて東京支部役員会にも姿を見せなかった柳本をはじめ、岩崎、大地、坂本(進)の諸君が待ち受けていた。杯を交わすのもどかし、次々に立ち上がって、今回の同期会の感想、次回の場所についての提案、各自の近況報告、そして三々五々の歓談、そして場所を移してカラオケ、このあたりでは女性たちは姿を消していた。

いよいよ別れの日、朝食後ホテルでチェックアウトとともに解散し、日光まで足を延ばした浜口(昌亮)君を除いて、それぞれに帰路についた。南部・田辺方面に直接帰る山口君と女性グループが、大丸の1階で土産物を買うのを案内し、新幹線に乗るのを見届けて、東京での同期会はめでたく終わった。

最後に、内輪褒めになるので少々気がひけるが、万事がスムーズに運んだのは、幹事4人のあいだでたえず連絡をとりあって、林がつねに金の出し入れに目を配り、坂本(孝彰)が名簿を新しく作り直し、浜口(忠夫)が伝えられてきた近況を整理し、浜田があちこちに電話連絡する、という具合に臨機応変に作業を分担した、そのチームワークの賜物だったといっただいではないか。いま振り返って、年来の旧友とのつながりの有難さを、あらためて感じている。

幹事として何より嬉しかったのは、“修学旅行”から帰った諸兄弟から、今度の同期会は楽しかった、参加してよかった、という手紙・葉書や電話が相次いだことである。玉木(旧姓岡本)みどりさんからは、手紙と一緒に、自分でカメラに収めたショットの数々を、優しく懐かしいメロディーに乗せて編集したDVDが、送られてきた。

さらに、これらの便りに劣らず心を動かされたのは、出席できなかった多くの人たちが、丁寧な近況報告を寄せてくれ、それに対して、折り返し新しい住所録と近況報告の一覧をまとめて送付したところ、それがまた大変喜ばれたことだった。

ちなみに、出席できないと伝えてきた人のうち、男性の半分は持病か足腰の不自由に悩んでいるのに対し、女性の方は趣味やボランティアの活動で忙しいという場合が多く、女性たちの元気が際立っている。男と女でどうしてこうも違うのかと考えさせられた。昭和28年の卒業の時点で総数96(男62名、女34名)だったが、そのうち鬼籍に入ったのは男20名に対して女5名で、ここでも大きく差が出ている。男性諸君、元気を出そう。

次の同期会はまた南部近辺で、という声が高かったが、今回参加できなかった人たちも、揃って元気な姿を見せてくれることを心から願っている。



「万葉のロマンを求めて ー紀伊国を中心にー」 昭和 29 年卒 嶋津 幸史(静岡県三島市 在住)

2010 年はまさに酷暑の夏であった。後期高齢者の仲間入りをした私にとっては、心身共に苦痛の日々が続き、その後遺症に悩まされている。

さて、私は目下ふるさとの紀伊国の万葉に取り組んでいる。120 余首といわれる紀伊万葉歌は、斉明・持統・文武・聖武天皇の行幸と深く結びつき、これらの行幸を中心として展開していると云っても過言ではない。

例えば、

南部の浦潮な満ちそね鹿島なる釣する海人を見て帰り来む (巻 9—1669)

という歌をみると、歌の歌詞に「大宝元年辛丑冬十月、太上天皇・大行天皇幸紀伊国時歌十三首」とある。これから推察すれば、文武天皇の大宝元年(701)に紀の温湯(現在、白浜温泉)への行幸時に詠作されたものであることが分かる。

万葉時代は天皇をはじめ多くの官人たちが奈良の都から、国境の真土山を越えてはるばる紀伊国へと旅するのであるが、当時の旅は苦しみこそあれ決して楽しいものではなかった。紀伊国の海や山の景観に心を奪われるといった、いわゆる物見遊山の旅ではないことは云うまでもないが、それならば何故に都人の多くが紀伊国へ旅したのであろうか。

結論から云えば、当時の人々は紀伊国のもつ風土の特異性、即ち紀伊国は「鎮魂」と「再生」の神々の領域であることを知っていたからである。紀伊国の海や山は特殊な世界であったのである。都の人々は黒潮の果てに永遠の楽土(常世国・甞の国)のあるのを信じ、紀伊国がそこに通じるところの代表地と観想して、長く苦しい草枕の旅を続けたのである。

紀伊国は大和の神々とは異なる神の領域であり、黒潮の海は死者の霊を鎮める神の場であり、木の茂る山々は霊を再生させる神の場なのである。

そして、これらの神々の息吹のもとで、旅人はそれぞれの心の鎮めを行い、その鎮めを歌に托す。そこに紀伊万葉歌の原点があるように思われる。

今から約千三百年前の万葉の人々が永遠のテーマである「生」と「死」という問いに対して、紀伊国へ旅することによって一つの解決を見出そうとしている点に古代のロマンを感じるのである。

一般に紀伊万葉はすぐれた歌が多いと云われている。就中、「みなべ」では、先掲の歌の他に、有間皇子の有名な挽歌二首

磐代の浜松が枝を引き結び真幸くあらばまた還り見む (巻 2—141)

家にあれば筥に盛る飯を草枕旅にしあれば椎の葉に盛る (巻 2—142)

が詠まれている。この事実からみても「みなべ」は紀伊万葉を語る上に於いては看過出来ない所であると云っても過言ではない。近年「みなべ」は、南高梅によって一躍脚光を浴びている事は、南高卒業生の一人として大変喜ばしいことである。欲を云えば次は「万葉の故地」としての価値を再認識してもらいたい、と云うのが私の夢でもある。

末筆乍ら、南高東京支部会員の皆様のますますのご活躍とご発展を祈念申し上げたい。

「人間のるつぼ インドを歩く」 昭和 33 年卒 竹中 司郎(川崎市麻生区 在住)

「南高」編集担当者から今年の会報にもインド旅行の続きを書くようにいわれました。

ちょうどインド旅行の本も書き上げて、間もなく製本完成するころでした。A5版で315ページになりました。

インド旅行は昨年10月から1ヵ月かけて行ったものでしたが、帰国して、4、50人ほどの集まりで写真をパワーポイントで投影して話したり、数人の飲み会で話したりしました。多くの人が興味を持ってくれました。



インドでいろんな体験をしましたが、その中で一つ。

インド最大の聖地ガンジス河の中流にあるベナレスでのことです。そこには毎日数万人もの人たちが聖なる河に沐浴して神さまにお祈りしていました。そこにわたしは5日ほどいましたが、わたしも神さまにお祈りしてみようと日本から持っていったローソクと線香を立てて河の中に入ってお祈りしてみましたがいきませんでした。わたしには、インドの神様がこころの中にはなかったからです。

そして、ある時お釈迦さんの聖地サールナートへ行った時のことです。ここでもローソクと線香を立ててお祈りしました。ここではうまくいきました。しかしよく考えてみるとわたしのお祈りの中には仏さんも阿弥陀如来さんも観音さんいりませんでした。いたのはわたしの父母や先祖たちの思い出でした。「育ててくれてありがとう。元気に暮らしていますよ。」と亡き父母に報告していたのでした。

そこでわたしが痛切に感じたのは、わたしは仏教徒ではないということでした。祖先信仰でしかなかったのです。わたしの

お祈りのこころの中には仏さんがいなかったのです。インドの人たちのようにシヴァの神さんやカーリー女神さんをこころの中に思い浮かべてお祈りをしていたのではなかったのです。

71歳になったわたしの家には仏壇もなく、日ごろお勤めをしたりする習慣がありません。科学技術や物質文明が果敢に進む現代社会の中で生きるわたしたち日本人に信じられる宗教とは何だろうか……。わたしも70歳を過ぎれば死のことも深く考え準備しておく必要がある。他人事ではない。そこでわたしの信じられる宗教とは何なのか、それを見極めたい。そしてわたし流の新興宗教を打ち立てて死んでいきたいと思っています。というのは、死は現代社会の物質文明とは何のかかわりもないからです。インドは素敵なことをわたしに気付かせ教えてくださいました。

*上記の本は出版ではありません。お読みになりたい方は学友会事務局(齋藤TEL045-383-8703)にご連絡ください。本の部数が少ないため回覧で読んでいただけると幸いです。

「富士登山」

昭和 42 年卒 杉野 雅子(東京都練馬区 在住)



同級生の紹介で学友会メンバーとなり、昨年初めて出席した総会・親睦会場で、南部に住んでいた頃のお兄さんと半世紀ぶり、そしてお姉さんとは 40 年ぶりに再会し、一気に子供の頃にタイムスリップしてしまいました。

海あり山ありの南部で生まれて育ったのですが、私は断然“海派！”かすかに聞こえる波の音の子守唄にしてよく眠れたし、大きな太陽が海に沈むのを見るのが大好きでした。釣り好きの父について渡し船で鹿島に渡り、波打ち際で遊びながら食べた潮気を含むパンは格別の味でした。

帰省するときに紀伊水道が見え、鹿島さんが見えてくると、胸が躍るのは私だけではないと思うのですが……。

南部高校を卒業して東京の学校に向かうときは、“卒業したら南部に帰るんだ！”と決意していたのに、南部で育った 15 年間の数倍も東京に居着いています。東京では、最近とみに南部中学校の同級生(昭和 39 年 3 月卒業なので、南中 39 会といえます)の交流が活発で、“海派”の私が“山派”に転向させられそうなのです。

年初に、ヤッホーの掛け声とともに年間の登山(山歩きかな?)計画書が届きます。初心者向けの山が中心なのですが、7 月の末には「富士登山」が組み込まれ、毎年断り続けていたのに、今年は首を縦に振ってしまいました。

妹が昔使った金剛杖を携え、一大決心で富士登山に挑みました。5 合目からのスタートで、7 合目からは歩いても歩いても 8 合目に到達せず、途中挫折しそうな私は「あとちょっと、あとちょっと」という励ましでようやく 10 合目に到達！

長くて苦しい道のりでしたが、最高のお天気に恵まれ、登山の途中見た茶褐色の富士山が葛飾北斎の絵みたいだ！とか、下から雲が私たちの後を追っかけてくる様子に感激した富士登山でした。また、下山途中で見た水色の石とそばに咲いた花がキレイで、片岡球子さんの富士山の絵を想像してしまいました。酸欠気味でノロノロ登山者を最後まで勇気づけてくれた、素敵な仲間との写真をご覧ください。



いつも 39 会の話をつらやましく聞く友達から、「達成感かしら、皆いい顔しているわね」といわれました。

来年の富士登山には、すでにみなべからの参加者も決まった様子。また最近39会の山登りに、南高の学友会メンバーが参加してくださり、ますます賑やかで楽しい集まりになっています。

「39 山の会」に参加して

昭和 40 年卒 齋藤 文子(横浜市保土ヶ谷区 在住)

一昨年の秋、この会報への投稿をお願いしたことがきっかけで、山寄春樹さんが 39 会の山歩きに誘ってくださった。初心者でも大丈夫という大山、ヤビツ峠から山頂まで最短のイタツミ尾根コースである。

最近ほとんど山歩きをしていない私にとって、「登れるかしら?」と多少不安がつきまとったが、自然を身近に感じられることに魅かれ、学友会の稲井さんをお誘いし参加させてもらった。

その日は3月末というのに予想外に寒く、何とそのイタツミ尾根コースは雪のためバスがヤビツ峠まで行かず、蓑毛コース(大山裏街道ともいう)へと変更になる。

そのコースは下から登るため最初から傾斜がきつく、私にとってはかなり厳しい登りとなった。少し歩いては、「はー はー」と息を切らしていた。しかし、リーダーの川口さんはじめ男性たち4人は皆やさしく、私たち二人の女性にたいそうな心配りをしてくれた。遅い私にペースを合わせてくれ、ストックの代わりになる木切れを見つけてくれたり手袋を貸してくれたりと・・・、至れり尽くせりである。こんなにやさしくしてもらっていいのかしら・・・と、みんなの温かさが身に沁みた。



川口さんはさすが山男! ムードメーカーでもある。愉快で、面白いことを言っでは私たちを笑わせたり、さまざまな歌を気持ちよく歌ったりしてくれた。驚いたことに、卒業した小学校・中学校の校歌まで実によく覚えている。感心するばかりであった。みんなで、遠い昔を懐かしみ、若返った気分で小・中学校の校歌をおもいきり歌いながら登った。このような雰囲気の中、登ることが少しずつ苦にならなくなってきた。

途中、眼下に江ノ島や広い海が見えてきたり、丹沢の山々や雪で真っ白な近くの山が見えたり・・・と、山は苦しいことばかりではないようだ。多少の苦しみの後には喜びがある。頂上に着いた頃には、雪でおおわれた木々がキラキラ輝いていた。この大山登りをきっかけに、その後も誘いがあるとワクワク・ドキドキしながら出かけていく私である。

39 山の会の愉快的メンバーの方々と自然の素晴らしさに魅かれて、6月に高尾山、10 月には高畑山～天神山～倉岳山へと参加させてもらった。実に楽しいひとときであった。ぜひ、みなさんも、この 39 山の会に参加しませんか!

「私の趣味(その2)」

昭和42年卒 山寄 春樹(神奈川県平塚市在住)

昨年のその1(山歩き)に引き続き、今回は趣味の一つとしてセーリングを紹介したい。セーリングを始めたのは、山歩きよりはかなり早く、30歳になる前だったと思う。当時私は芦屋(浜)の高層住宅に住んでいて、マンションの窓から毎日海が良く見えた。たまたまダイエーの主催するヨット教室があり(ヨットに一人で乗れるようになるのも悪くない!)くらいの気持ちで、教室に参加した。教室の生徒は12~3人位と先生が一人で生徒は私と同年代が3人と残りは学生など私より若い人たちだった。



ヨットはミニホッパーという、一人乗りの全長11フィート(3.3m)の小型ディンギーで(いきなりの初心者でも、1日乗ればだいたい操船できるようになる)その教室に6月の週末毎に4日間通って何とか一人で乗れるようになった。同じ年の9月にレースがあるから参加しないかと誘われ、自信は全く無かったが、ものは試しと出場したところ、70艇くらいの参加艇で、予選、準決勝、とどういわけかどちらもぎりぎり辛くも勝ち残り、決勝ではなんと2位に入賞できた。そんなことから、少しは素質があるのかな?と自らうぬぼれ?したのがきっかけでヨットを始めることになった。

神戸では最初の教室で教えていただいた同い年の S さんとセーリングクラブを立ち上げ、ヨットだけでなく、水上スキーや、模型のヨットレースなどを一緒に催したりした。クラブ員の中にクルーザーのオーナーがいて西宮から淡路島のサントピアマリーナ(洲本の近く)に一泊して徳島まで阿波踊りレースと阿波踊りに参加したこともあった。その時のクルージング往復時の日焼けが今でも私の背中にシミとしてしっかりと記憶されている。時代が昭和から平成に変わる頃、仕事の関係で、神戸から神奈川に転勤した私は湘南おじさんにでもなろうか?と思い茅ヶ崎、江ノ島あたりの湘南をベースに活動したいと考えたが、いつの間にか家族が7人に増えて、湘南でヨットをするには経済的に負担が大きかったので、たまたま雑誌「KAJI」で見つけた山中湖に保管していた中古の470級のディンギーを手に入れ、以来、夏の間はできる限り山中湖でセーリングを楽しむこととしている。またいつしかジェットスキー、やウエイクボードをする仲間も集まり、私もジェットスキー、ウエイクボードを楽しむようになった。



子どもたちと一緒にヨットのお掃除

また昨年の定年を機に江ノ島で活動している会社の先輩から誘われ、主に子供たちを中心としたヨット教室で、お手伝いのボランティア活動などをするようになり、念願の「湘南おじさん」ならぬそろそろ「湘南爺さん」として、時には知り合いのクルーザーに乗せてもらったりしている。この趣味も体力が(それほど要らない)許す限り続けようと思っている。

「愛犬ベルの思い出」 昭和40年卒 影本 嶠記子(旧姓 大坪)(大阪府四条畷市 在住)

南部中学校に入った頃、茶褐色の柴犬をかい始めました。雄の仔犬でした。二人の妹はまだ幼かったので犬の世話をするのは動物好きの私の仕事になりました。犬はベルと名づけ裏庭でかっていた。私は日曜日にはベルと一緒に海辺や山を歩き、みなべの自然を満喫しました。

春の海 ひねもすのたり のたりかな

という与謝蕪村の句[ひねもすは一日中の意]を後に学校で習った時にはベルと歩いた海岸を思い出して「あれだ!」と思いました。本当に春のみなべの海は静かでのたりのたりと波打っていたのです。

うすべにに 葉はいちはやく萌えいでて 咲かむとすなり 山桜花 若山牧水

この歌に出会った時は、早春に山桜をあちこちで咲かせていたみなべの山々を思い浮かべました。

山桜は先に葉が出たあとに白い花が咲くのです。

ベルは、小さい頃は散歩中、トカゲなどを目ざとく見つけ、前足で押さえたり転がしたりして夢中で遊びました。それで私がベルをぐいぐい引っ張らなければならませんでした。しかし、大きくなってからは時々私の手を振り切って逃げました。そんな時は数秒間疾走した後、また全力疾走でもどってきます。要するに私の前を行ったり来たりするわけです。それはまるで、「どうだ、ボクはこんなに速く走れるんだぞ。つかまえられるものならつかまえてごらん。」とでも言っているかのようでかわいくてたまりませんでした。

そのうち私も賢くなり、待ち構えていて目の前に走ってきた時、さっと手を伸ばしクサリをつかめるようになりました。つかんだ瞬間、私の方がバランスをくずして青々とした草原に倒れこむことも度々でした。本当に楽しい日々でした。

三年生になりました。先生方から、今年から生徒数が増え希望者全員が高校にいけるとは限らない、勉強しない者は高校へいけないぞ、とおどされました。確かに、前の学年は三クラス、私たちの学年は四クラスで、生徒数の増加は一目瞭然でした。

私は人が変わったように勉強するようになりました。音楽部もやめてしまいました。顧問は音大をでたばかりの聡明で美しい女性でした。歌は好きでしたし、マドンナ先生や他の部員との交流も楽しかったのに惜しいことをしました。今までと同じ生活をしていると希望の高校へはいけないと思ってつらいのがまんじりしたのです。

しかし、一生懸命勉強するようになると、犬の世話がおろそかになっていきました。散歩の回数を減らしたり、ワンワンほえても無視したりしたのです。ベルがあんなに喜んだ日曜日の遠出もほとんどできなくなりました。今思えば身勝手に残酷で無責任極まりないことでした。

六月のある日、薄暮の頃でした。いつの間にかベルはクサリをつけたまま、逃げてしまっていました。ああ、その後のことは思い出したくもありません。

ストレスをためていたベルは、近所に来ていた知らないおばさんにほえて怒られ、お尻に咬みつきました。そしてほどなく捕縛され保健所に連れていかれました。私にはベルを救い出す知恵も力もありませんでした。

翌春、希望の高校の希望学科に入学しました。あれから五十年近くたちますが犬も猫もかったことがありません。あれはずいぶんこたえました。



ミニギャラリー



「ざくろ」



「赤い実」



「もくれん」



「南部梅林」



「小海 高原の教会」

「ざくろ」「もくれん」「赤い実」
(ハガキ大)「南部梅林」
(F6)は石田明子さん(昭和31年卒)、「小海 高原の教会」(F30)は藤 俊さん(昭和40年卒)の作品です。

前田 至美 坂本 龍 大原 弘子 竹中 美晴

*敬称略

上記の方々からご寄付をいただきました。心よりお礼申し上げます。
会のために有効に運用させていただきます。

訃 報

昨年 11 月、南高学友会東京支部 前役員 長岡(旧姓 和田)早苗さん(昭和 44 年卒)が永眠されました。南高学友会のために多大なお力を注いでくださいましたことに心より感謝申し上げます。ここに 謹んでご冥福をお祈りいたします。



～～馬込散策の後、参加された岩本喜直さんから次のようなお便りをいただきましたのでご紹介します～～

大変お世話になりました。

大田区は私のオフィスがあったり、大田区さんの相談員の時期もあったので、中小企業の工場の街との印象が強かったのですが、この度の馬込文士村のウォーキングは私の考えてもいなかった街並みで、今までの私のウォーキングとは随分違った印象的なものでした。著名な方が多勢住んでいたところなのですね。

大田区の友人に話すと、JR の南側と北側は全く別の雰囲気 of 街だそうで、東急池上線も当初は馬込を突きって真直な路線を計画したそうですが、当時の馬込の住人が景観をそこねると反対して現在のような迂回ルートになったと聞きました。そのせいもあって交通の便は少し悪いのかもしれませんが、散歩にはもってこいのところでしたね。

世話人の皆さまのお蔭です、有難うございました。



神奈川地区で始まったご当地散策が埼玉に続き、去年は千葉、東京地区でも行われました。実施日が重ならないように連絡を取り合ってたことでした。いずれの散策も日常と異なる場所で新しい出会いもあり、おおいに刺激を受けました。ご希望の場所がありましたら、ぜひ事務局スタッフまでご連絡ください。

皆さんと歩いてみましょう！

ウォーキング担当者

編集後記



一年経つのが早い!! というのが実感です。この会報作成・編集等にあたる頃は、もうすぐお正月。皆さまにとって、平成 22 年はどのような一年間だったでしょうか。

さて、今年度も会員の皆さまや編集スタッフの協力のもと、第8号を作成することができました。年々、多くの方が気軽に投稿して下さるようになり、とても嬉しく思っております。それぞれの方の文章をご覧になり、驚いたり共感したり・・・学友会の仲間をより身近に感じられるのではないのでしょうか。

この会報がさらに多くの方々にご愛読いただけることを、スタッフ一同心より願っております。

なお、編集にあたっては、稲井・岩本・林・灘井・寺西・齋藤が担当しました。今後とも会員の皆さまからの投稿や情報をお待ちしております。写真も添えてくだされば有難いです。

新しい年、皆さまのご健康をお祈りし、皆さまとともに歩んでまいりたいと思います。よろしく願いいたします。



事務局スタッフ



宮下 典子 (旧姓 西林) TEL・Fax 03-3986-3253 稲井 清子 (旧姓 真造) TEL・Fax 0467-58-3492
木村 允彦 TEL・Fax 0487-86-3514 岩本 喜直 TEL 049-2